

本稿は、Recanati の理論と認知言語学を比較し、その類似性と相違点を探る。まずはじめに、(1)~(9)の用例を挙げ、Recanati (2004)における文脈主義が認知言語学の考え方と整合性が高いことを指摘する（用例は原文では英語）。

- (1) a. le livre *de* Jean  
b. Jean a fini un livre.
- (2) J'ai pris mon petit-déjeuner.
- (3) Tout le monde est allé à Paris.
- (4) a. Il mange du lapin.  
b. Elle porte du lapin.
- (5) Le distributeur de billets a avalé ma carte de crédit.
- (6) Il y a un grand lion au milieu de la place.
- (7) Il est allé à la falaise et a sauté. (He went to the cliff and jumped.)
- (8) Marie a sorti la clé et a ouvert la porte.
- (9) L'agent de police a levé la main et a arrêté la voiture.

(1)はunderspecificationと呼ばれ、句や文の意味が未決定な例、(2)~(3)は、文脈（常識）による限定がないと無意味な文になる例、(4)~(6)はmodulationなどと呼ばれ、語の意味が文脈によって大きく変容する例、(7)~(9)も同様であるが、先行する節によって後続する節の意味が変容するまたは詳細化されることがデフォルトとなる例である。用語は異なるが、文脈によって、語や文全体の意味が変容することは、認知言語学が早くから指摘してきたことであり、両理論は非常に整合性が高いことを主張する。

次に、主に、Recanati (2007) を取り上げ、その中のimplicit *De se* と、explicit *De se*の区分がLangacker (1990)の主観化に関する区分、池上(2003)の主観的把握と客観的把握の区分と合致することを指摘する。また、explicit *De se*, implicit *De se* にDe reを加えた3項の関係を示した図 (Recanati 2007:193) は、池上(2003)の3区分と合致することを指摘する。

最後に、Recanati の理論と認知言語学の現時点での大きな相違点として、構成性の原理に対する両者の立場を検討する。Recanati (Recanati 未発表原稿)は、構成性の原理を支持する立場を表明しているが、同時に構文にまつわる文脈的意味 (constructional meaning) の存在を指摘している。構文に固有の文脈的意味を認めることは、構成性の原理と矛盾する可能性が高いことを指摘する。

池上嘉彦 2003. 言語における<主観性>と<客観性>の言語的指標 (1) 『認知言語学論考』 3: 1-49.

Langacker, Ronald. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1 (1): 5-38.

Recanati, F. 2004. *Literal meaning*.

Recanati, F. 2007. *Perspectival thought: A plea for moderate relativism*.

Recanati, F. 未発表原稿 Semantic Flexibility: the Case of Adjectives